

竹田 有著

『アメリカ労働民衆の世界』

評者：南 修平

本書は日本のアメリカ労働史研究の代表的存在である竹田有氏による、これまでの研究の集大成的著書と言える。竹田氏が冒頭で「本書は、労働組合史でもなく労働運動史でもなく、労働者階級の社会史である」と簡潔に述べていることから分かるように、本書は労働現場やコミュニティで直面する諸課題に苦闘するアメリカ労働民衆の物語である。竹田氏が言う「労働者階級の社会史」は、昨今のアメリカ史研究においてますます盛んである社会史研究の先鞭をなすものであり、今やそれはアメリカ史研究の重要な一分野となっている。イギリスの労働史家 E. P. トムスンが『イングランド労働者階級の形成』で描いたように、その視点は労働組合と政府・資本家階級という大きな枠組みの中で労働者の状態を論じる制度や組織を中心とする旧来の研究とは大きく異なるものであった。社会史としての労働史が画期的であったのは、従来の歴史叙述の中では埋没していた一般労働組合員や未組織労働者等労働民衆の生きる姿、相互の絆の存在に光を当て、労働現場やコミュニティなど日常生活全体から自律的存在として労働者を捉えようとしたことである。このトムスンに触発されて、アメリカでも様々な無名の労働者の姿に目が向けられ、個々の労働者の思想や

行動が決して賃労働と資本という階級関係のみで決定されるわけではなく、実際には多様かつ複雑な側面を持つ歴史の主体としての姿が明らかにされてきた。ハーバート・ガットマンを嚆矢として続々と現れた労働史家たちの新潮流—「新しい労働史（新労働史学・New Labor History）」は、その後のアメリカ史研究に大きな影響をもたらしたのである。

ガットマンらの研究は日本のアメリカ史研究をも大いに刺激し、新労働史学の成果は特に野村達朗氏の手でいち早く紹介されることとなった。また野村氏自らも新労働史学の成果を積極的に取り入れ、世紀転換期のニューヨークに生きるユダヤ移民の様子を生き活きと描くなど、重要な貢献を果たしてきた。竹田氏は野村氏に続く世代としてこれまでに数々の論稿を著している。中でも、飛躍的産業発展を遂げた19世紀末から20世紀初頭のアメリカ社会で、資本の圧力や社会の激変に直面したアメリカ労働民衆が資本といかなる関係を取り結んでいくのかというアメリカ的労資関係の特質を明らかにしようとした先駆的研究が知られる。

本書はそれらの研究に加え、近年竹田氏が力を注いできた労働史と都市史の架橋を試みる諸論稿が収められ、二部構成となっている。序章で本書の視座と構成が述べられた後、第Ⅰ部「アメリカ的労資関係の形成」（第1章～第6章）、第Ⅱ部「アメリカ的居住空間秩序の形成」（第7章～11章、終章）と続く。以下、その構成に沿って評していきたい。

第Ⅰ部に含まれる論文に共通する問題意識はいかにしてアメリカ的労資関係が形成されるに至ったかであり、19世紀末から20世紀初頭におけるアメリカ労働民衆の動向を検証する諸論文が続く。竹田氏は労働騎士団、アメリカ労働総同盟（AFL）、社会主義労働者党などが入り乱れるこの時代に労働共和主義が衰退し、ラデ

ィカル勢力が駆逐されて職能別組合主義が色濃いAFLが台頭（生き残り）する過程を、新労働史学の成果を用いながら首尾よく整理している。新労働史学以前のアメリカ労働史に支配的であったウイスコンシン学派は、急速に衰退した労働騎士団の役割やそのイデオロギーの中核である労働共和主義—労働者と小規模商工業者を連合させた「生産者階級」による生産者協同組合主義の実現という思想を「時代遅れ」と見なし、否定的な評価を与えていた。こうした評価に対して竹田氏は、ボストンに残されていた労働騎士団の1次史料を駆使し、実際には労働騎士団が思想上も実践上も一枚岩ではなく、地方によってかなり差異があり、各地区組織のイデオロギーや優先的に取り組まれた実践課題は広範囲に渡っていたことを明らかにする（第3章）。労働騎士団の再評価はガットマン世代に続くレオン・フィンクの研究に見られるようにアメリカでも大いに進んでおり、竹田氏の研究もこの流れの中に位置づけられよう。竹田氏の手法にはローカルな単位での労働者の実態を明らかにしつつ、その在り様を大きな時代的文脈の流れにおいて論じようとする新労働史学の影響が強く見られ、大変興味深い。

その一方で竹田氏は、労働騎士団の衰退と並んで当時の労働者階級が職能別組合主義へ傾倒していった要因として、極めて暴力的なアメリカの反労働者政策やその風潮を強調している（第4章）。「アメリカではなぜ社会主義が育たなかったのか」という問いは歴史学以外に政治学や思想史など他の学問分野でも度々議論され、その中では労働者の個人主義—階級意識の希薄さや人種の民族的多様性による団結の阻害、早期の選挙権獲得等がヨーロッパと異なるアメリカ例外主義の要因として指摘されてきた。竹田氏はこうした議論の重要性を認めつつも、それらを「非歴史的・抽象的推論」と断じ、

アメリカ資本家階級や国家権力の強い反労働者の性格を世紀転換期という社会全体の変化が激しい特殊的状況の中で分析することを主張する。アメリカ資本家階級と国家権力が暴力的な反労働者性を増大させていく過程について経済的・政治的側面から検証する竹田氏は、連携を深める資本と国家による労働者への暴力的攻撃が、「ビジネス・ユニオニズム」という保守的組合主義の選択へ労働者を追い込んだ側面を重視する。竹田氏が提示する観点は、資本の根源的性格やそれと国家の関係という、近年の社会史研究で見落とされがち大きな権力構造へ改めて注意を払う必要性を感じさせる重要なものである。グローバリゼーションが進行する中で国家の相対化が指摘されて久しいが、必要なのはトムスンやガットマン以降発展し続けてきた社会史的視点を用いつつ、人々が生活するローカルな場で公権力、資本が、具体的にどのような役割を果たしているのかを詳細に検証することであり、安易な結論を避けることだろう。

労働騎士団の消滅とともに労働共和主義が20世紀初頭には終焉を迎え、労働者を取り巻く状況が一層厳しさを増していく中、竹田氏が注目した実践例が、第5章で論じられる合同衣服労組（ACW）の経験である。1914年にAFLの指導に反発する労働者が結成したACWは、第1次世界大戦期からその直後の時代にかけてシカゴやニューヨークで次々と組織化を果たして勢力を拡大した。同時にACWは、労働者が持つ技術や知識を武器に生産現場の管理に関する経営側との交渉を有利に進め、労組の有用性と影響力を経営側に看過出来ないものとして認知させた。指導者シドニー・ヒルマンの卓越した指導力もさることながら、個々の労働者が有する工程についての具体的知識や創意工夫が威力を発揮し、それが経営側との力関係に十分作用したことに對し、竹田氏はワーカーズ・コン

トロールの実例として大きな評価を与えている。経営側が求める生産の効率化や人員合理化要求に協調的姿勢で臨みつつ、可能な限り雇用確保や労働条件の改善を図るACWの立場は諸刃の剣であり、ともすれば体のいい労務管理係に陥りかねない。しかし竹田氏は、ACWの実践が「産業民主性の構築」であり、「生産性と効率の向上への「協調」は数々の犠牲と譲歩を生みながらも」「経営権を大幅に蚕食するものであり、企業ならびに産業の共同管理を意味した」という点でACWの『協調』はラディカルであった」と結論付ける。

「経営権の蚕食」という点に関してはACWだけでなく、他の労組でも類似の例は見られる。ACWがAFLの協調と異なるのは「AFL主義は組織化努力を放棄し、効率化に貢献できるプラス要素として自らを売り込み、経営側から認知を得ようとする『精神的に敗北した組合主義』であったからである」と竹田氏は言う。「精神的に敗北した組合主義」の具体的内容は明示されていないが、この点はより精緻な検証が必要である。後にCIO設立の母体となるACWの実践は労働現場に留まらず、エイブラハム・カザンの指導の下ニューヨークで進められた労働者のための安価な協同組合住宅建設やそれを中心としたコミュニティ環境の整備など、労働者の生活全体の安定を図る先駆的取り組みが認められる。他方、AFL傘下においてもニューヨークの電気工労組（Local 3）による労働現場での権限拡大やコミュニティ全体の改善を目指す実践はACWに匹敵すると言える。両者の相違を政治的立場だけに求め、他方を「AFL的協調」として一括する展開には、より慎重さが求められよう。組合の地盤や組合員の人口構成・出身地域の特徴、業種特有の経営側との関係、同じく業種・職種特有のジェンダー意識や政治文化、労働文化など労組や労働者に付随する条件

について検証すべき点は多々有り、それらを明らかにすることが労働者の全体像のさらなる明確化につながるのではないだろうか。

第II部では労働史と都市史の架橋を試みる論稿が収められている。竹田氏は両者の架橋に関して「労働と生活、職場とコミュニティは密接に関連しており、生活の場における労働者の状況や活動に分析の光を当てない限り、労働者階級の全体像は明らかにならないし、労働の場における彼らの行動も十分には理解できない」と述べ、その前提として「都市の構造」を具体的にすることを挙げる。まず第7章で労働史と都市史の架橋の必要性和意義が展開され、アメリカの主要都市で人種・エスニシティ別に分離した居住空間の形成が進んだことが示される。そして分離した生活空間の存在が人種・エスニック意識を強化し、労働者の階級意識の形成にマイナスに作用することで、労働者は階級闘争を担う力量とパースペクティブを持ち得なくなったと竹田氏は主張する。以後の章ではこの議論をベースに諸都市の事例が検討されている。

竹田氏の関心は、都市構造の変化の過程で人種・エスニシティ別に住み分けが進むことに向けられ、ボストン（8章）、ピッツバーグ（9章）、シカゴ（9、10章）、ニューヨーク（11章）などでの人種・エスニシティ別居住空間の形成が、いかに階級的連帯を阻害していったかが論じられている。一連の論文の中では書き下ろしの第9章に注目したい。竹田氏は第1節ピッツバーグ、第2節ではシカゴを対象地域として、ポーランド系移民、アイルランド系住民、黒人の三者関係を階級、人種、エスニシティの観点から分析し、居住エリアのマップや各種人口統計資料を用いて、各々が階級的連帯を志向するよりもエスニシティや人種を基盤とする絆の強化へ進んでいったことを明らかにする。特に第2節で扱われる1919年に発生したシカゴ

人種暴動の事例では、暴動に直接参加しなかったポーランド系住民が、暴動の主役たるアイルランド系に続いて「白人」であることの重要性を学んでいくとの展開は興味深い。

暴動を契機とする白人性の獲得・深化に関してデイヴィッド・ローディガーのホワイトネス研究と比較すると、竹田氏の場合は労働現場での雇用対立及びそれと同時的に進行した居住区域の分離を重視していることが際立つ。労働現場での民族的・人種的同質化、その枠内だけでの階級的団結の強化は黒人やメキシコ系を排除する傾向を一層促し、また特定人種の排除を明記する居住地域の制限約款がカラーラインの構築に威力を発揮したことで、ポーランド系移民の間に「純粋なアメリカ人意識」が形成されていったという竹田氏の説明は明快である。

評者はアメリカ労働史研究の若輩に過ぎないが、日本のアメリカ労働史研究のさらなる発展を望むゆえ、現在の労働史の動向を踏まえ、本書の問題点を敢えて指摘しておきたい。最も違和感を覚えるのは、竹田氏が本書の意義の一つに挙げる「わが国ではほとんど研究蓄積のない労働民衆の先駆的な実証研究であること」という点である。日本のアメリカ労働史研究における竹田氏の実証性は、本書にその一部が収められている労働騎士団研究などからも言うまでもない。しかし、「実証性」という点に関しては留意が必要と感じている。本書の構成では1次史料の使用が非常に少なく（特に第Ⅱ部）、その多くが2次文献に依っている（2次文献の渉猟は驚嘆である）。実証性の問題は昨今のアメリカ労働史研究で大きな問題になっており、特にエリック・アネセンに代表されるホワイトネス研究・ローディガー批判—「実証性の弱さ」、その要因としての「1次史料の渉猟・分析不足」という指摘は重要である。本書第Ⅱ部では特定の2次文献に依拠した展開が多く、1次史料を

通じた実証作業はほとんど見られない。ポーランド系移民の白人意識の獲得という重要なテーマを論ずるには、労働現場におけるエスニシティの絆の在り方、コミュニティにおける文化的統合の具体性、教会や各種クラブ、イベント等移民同士の結合を促す役割を担ったそれらの内容・効果等々明らかにすべき課題は数多くあるように思える。1次史料重視の方法論的問題やそもそも関連史料が存在するのかという制約はもちろんあるが、白人意識の獲得というテーマにおいては、様々な1次史料を渉猟して実像を浮かび上がらせる実証作業によって、より説得力が増すのではないだろうか。

新労働史学を超えてその先を進む現在のアメリカ労働史研究では、これまでの研究手法に対する批判が盛んである。ゲイリー・ガースルは、社会の状況を全体で捉えるために分析対象をローカルな場に絞り、「労働者がどこで働いていたかだけでなく、どこに住み、どこで折り、どこで余暇を過ごし、政治行動ではどこで結集したかを知る」点の有効性を訴える。労働者の全体像を明らかにし、それを歴史の大きな文脈に位置付ける労働民衆史の魅力はこうした作業を丹念に行うことでますます輝くのであり、竹田氏の提唱する都市史との架橋では、まさにそうした作業が欠かせない。幸い昨今のアメリカでは労働者に関する1次史料が豊富に収集されてアクセスでき、今後の成果が期待される。

いずれにしても、本書が新労働史学以降の労働史研究で重要な到達点を示すものであり、今後の研究に多くの示唆を含む意義は失われることはない。労働史だけでなく歴史研究の一冊として本書が広く読まれることを強く望む。

（竹田有著『アメリカ労働民衆の世界——労働史と都市史の交差するところ』ミネルヴァ書房、2010年9月、vii+400頁、定価6,500円+税）

（みなみ・しゅうへい）